

日本近現代文学におけるタイ表象の研究

タナポーン, トリラッサクルチャイ

<https://doi.org/10.15017/1440992>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

論文審査等の結果の要旨

本論文は、近代日本におけるタイ表象を新聞・紀行・旅行記および文芸作品を中心的な素材として考察した内容となっている。

構成は、序章、第1部「メディアの中のタイ」（第1-2章）、第2部「日本文学におけるタイ」（第3-6章）、終章となっている。第一部では、タイについての新聞や旅行記などの資料を中心に検討し、第二部では、第一部の検討結果を背景に、小説におけるタイの特色について検討している。なお、第1部・第2部ともに検討の時代的範囲は、明治期から1990年代までである。

序章は、本論文における問題の枠組みの提示と先行研究の整理および各章の概要の紹介である。

第1章は、「読売新聞」におけるタイ関係記事の検討と考察である。タイ表象の背景的文脈として、明治・大正期には南進論や移民政策が、戦前の昭和期には貿易と「大東亜共栄圏」が深く関係していたとし、戦後以降はタイ情報の増加と多様化に伴うイメージの多様化に特色があるとして、近代日本におけるタイ表象の通時的輪郭を描き出している。

第2章は、タイ紀行・旅行記を素材に、日本人の眼差しのあり方の変容について検討する。明治・大正期は、資源の存在を伝える記述や国益に資する報告書的性格に、昭和10年代以降は、日本企業への貿易奨励、近代化の要素、エキゾチックな記述に、高度成長期以降は、買春や麻薬のイメージに、1980年代末以降は、観光客の急増と呼応した多様なタイ・イメージの表象に、それぞれ特色があるとする。

第3章は、近代の山田長政テキストにおける「シャム」イメージの変遷を検討する。遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』（1899年）に明治期南進論を奨励する意味合いを読み、角田喜久雄『山田長政』（1940年）のロマンスには「大東亜共栄圏」のイデオロギーの反映があるとし、遠藤周作『王国への道 山田長政』（1979年）は、同じ表象の構造を用いながら、アユタヤ＝シャムを「怖ろしい」女として描写する点に戦後的な特色があるとする。

第4章は、南方徴用作家のタイ表現に共通するのは、戦地における癒しの空間としてのタイであり、その空間性は、日本（男）・タイ（女）のロマンスとしても反復されると指摘する。その上で、こうした記述の特色は、タイの人気小説『メナムの残照』（1967年）などにも見られるが、親日と反日感情の混在がある点に、日本のタイ表象を内面化しつつ変容するタイの複雑な自画像が窺われるとする。

第5章は、1970-1980年代のミステリーにおけるタイ表象を考察する。その特色は、戦前からパターン化されたロマンスの構造を頻用しながら、社会問題に言及し、貧しいタイ人女性労働者を登場させる点にあるとする。その女性を救い援助する日本人男性は、しばしば主人公で、そうした主体化のパターンは、同時代の日本人による売春行為を美化してしまう言説構造を持つことを指摘している。

第6章は、村上春樹「タイランド」（1999年）を検討する。「タイランド」は国際的な都市性、リゾート化された癒し空間、未開地的な要素が同居するタイの奥行きを描き、登場人物の「ニミット」という名にも、タイ語の複数の意味が仮託されていると指摘する。しかし、一般の日本人読者には、ニミットが持つ複数性や象徴性は読まれず、日本人にとってのタイの画一的なイメージとタイの側から見た場合の奥行きとの非対称性を黙示的に示したテキストが「タイランド」であるとする。

終章は、各章の内容を整理しつつ日本近現代文学におけるタイ表象の変容が、〈シャム〉〈タイ〉〈タイランド〉の三つの語に呼応することを確認している。

本論文は、近代日本におけるタイ表象という課題に対し、文学という領域での応答としては、従来の同種の研究に見られない水準で全体を俯瞰した最も総合的な研究成果である。それは、いまだ十分な蓄積がない日タイ関係の研究についても寄与するところ大であると考えられ、博士（比較社会文化）を授与されるに十分な内容と意義を有すると判断した。

最終試験の結果の要旨

甲 第 号 氏 名 トリラッサクルチャイ タナポーン

調査委員
主査 九州大学 松本常彦
副査 九州大学 波瀨 剛
副査 九州大学 西野常夫
副査 福岡教育大学 久保田裕子
副査 プール学院大学 木村 一信

最終試験の結果の要旨

九州大学大学院比較社会文化学府の命により、平成26年2月16日（日）15時00分から17時00分まで比文言文棟第2セミナー室を会場として、トリラッサクルチャイ・タナポーン氏の博士学位申請論文（比較社会文化・甲）の公開審査を開催した。最初に、主査が委員の紹介および当日の審査の次第について説明し、次に申請者による論文概要の説明を受け、各委員との間で質疑と応答を行った。申請者は、各委員からの質問や意見に的確に応じた。論文内容および公開審査での応答を踏まえ、合議の結果、委員全員一致で、申請者が博士の学位を授与されるに十分な資質と知見を有すると判断した。